

伊方町の小中学校・高等学校の校歌について

～ 過疎地域における学校の統廃合と校歌 ～

(教育学部) 市川 克明

The school hymn of the primary, secondary schools and high school in Ikata

– The merger and school hymn in the depopulated region –

Katsuaki ICHIKAWA

(2022年9月1日受付・2022年10月18日受理)

序

現在西宇和郡伊方町内には、小学校5校、中学3校、高等学校1校が存在する。すなわち、伊方町立伊方小学校、九町くちょう小学校、伊方中学校（以上伊方地区）、三机みつくえ小学校、大久おおく小学校、瀬戸中学校（以上瀬戸地区）、三崎小学校、三崎中学校、愛媛県立三崎高等学校（三崎地区）である¹。

2005年の「平成の大合併」（旧伊方町、旧瀬戸町、旧三崎町が現伊方町に）後に閉校になった小学校は、豊之浦小学校（2009年閉校）、塩成しおなし小学校（2009年閉校）、二名津ふたなづ小学校（2013年閉校）、佐田岬小学校（2014年閉校）、二見小学校（2015年閉校）、水ヶ浦小学校（2019年閉校）で、大合併以前の伊方町、瀬戸町、三崎町の三町時代（1955～2005年）には、小中学校合わせて32校存在した。また、「平成の大合併」時には1万2000名ほどであった人口も、急速な過疎化により現在は7981名で²、8000名を割り込んでいる。それに伴う少子化により、合併以降の約15年間でさらに小中学校の閉校が続ぎ、伊方町内に11あった小学校は5校（伊方および瀬戸地区2校、三崎地区1校）に、4校あった中学校は3校（伊方、瀬戸、三崎各地区に1校ずつ）に集約されている³。

これら閉校になった学校の校歌に関して研究調査を行い、「伊方町（旧）における閉校になった小中学校の校歌について⁴」（2017年）、「瀬戸町（旧）・三崎町（旧）における閉校になった小中学校の校歌について⁵」（2018年）の2編を愛媛大学地域創成研究センター紀要で発表した。

本稿は、伊方町内に存続する8校の小中学校と県立高等学校1校の校歌に焦点を当てた研究報告である。地域誌、町史、記念誌など様々な文献を元に調査を実施、地域や学校の沿革と校歌の制定、対象となる学校の協力のもと校歌の楽譜収集を行い、付属資料に歌詞・楽譜資料を掲載した⁶。歌詞の内容、楽曲分析、作詞作曲者に関して調査を行い、また、可能な限り作詞作曲者ご本人にコメントをいただく形で研究を進めた。

小学校は地域教育の根幹であると同時に、地域コミュニティの最小単位である。すなわち、同地で生を受けた人々が義務教育の最初の6年間通学し、また、その後も地元に住する者にとっては、老若男女を問わず卒業後も密接な関係を持っている。かつてそれぞれの村単位に存在した中学校も同じ役割を担っていた。そして、現在残る学校も減少したとはいえ同様の意味を持っている。

1. 伊方町の地域特性⁷

伊方町は愛媛県西端の佐田岬半島のほぼ全域を占める地方自治体である。佐田岬半島は、幅は最大で約6.4km、最も狭い三机湾から塩成地区間しおなしではわずか800メートルであるのに対し、長さが40キロメートル以上という東西に極端に細長い半島である。標高約300mの稜線が細長い半島の背骨のように延び、半島の伊予灘側（瀬戸内海方面）、宇和海側の両側に急速に海に落ち込む地形を有している⁸。したがって、「島嶼的特徴」が色濃く⁹、特に県道八幡浜三崎線が開通（1958年）以前は、それぞれの地域の交流が非常に困難であったと言われる。事実、それ以前は、船舶が主たる移動手段で、中型船は佐田岬半島の各港に接岸できないため、人々は、沖合に停泊した中型船から小型船に乗り換えたり、物資も同様に荷揚げされていた。

明治の町村制・市制施行（1889年）の際、西宇和郡伊方村、町見村（以上旧伊方町）、三机村、四ツ浜村（以上旧瀬戸町）および三崎村、神松名村（以上旧三崎町）が成立した。例えば、町見村は、九町浦と二見浦の2つの地域が合併、神松名村は、明神浦、松浦、名取浦、二名津浦、平磯浦および釜木浦が合併したいずれも合成地名の村名である。また、同じく、四ツ浜村も、川之浜浦、大久浦、田部浦、神崎浦の4つの浦が合併して成立した一種の合成地名である。

これらの村が成立した明治初期、現伊方町に含まれるの6村、すなわち伊方村、町見村、三机村、四ツ浜村、三崎村、神松名村では、著しく交通の便が悪いこともあり、主要な浦ごとに小学校が設立されていた。それ故、この地域には1970年代に創立百年を迎えた小学校が多数存在した。

6村は昭和の大合併（1955年）により、それぞれ伊方町、瀬戸町、三崎町の3町に合併、2005年の平成の大合併により、旧伊方町、旧瀬戸町、旧三崎町が合併して現在の伊方町となっている¹⁰。

1955年の3町合併時には小中学校合わせて32校が存在していた。その後、学校の統廃合が進み、現在町内には高等学校を合わせて9校が存在している。

また、佐田岬半島突端部に近い三崎村において、県立高等学校設立（1951年）は村民の悲願であり、その精神は現在でも引き継がれている。

2. 伊方町内の小学校

2.1 伊方小学校（伊方（旧伊方村）地区）¹¹

伊方小学校は明治初期、1879年創立の「群魚（むれな）小学校」を起源に持ち、第二次世界大戦後の学生改革により1947年、伊方小学校が設立した。同時に、大浜小学校（1952年から水ヶ浦小学校）、有寿来小学校、豊之浦小学校の4校も開校した。これら4校は、2000年から2019年にかけて伊方小学校に吸収合併される形で閉校となった¹²。

伊方小学校校歌は1964年に制定され、梶谷駒繁氏作詞、作曲は宇都宮義秋氏である。梶谷氏は伊方小学校第18代校長（1962～1970年度）である。宇都宮氏は、八幡市立松柏中学校校長（1965～1966年度）他を歴任、八幡市立日土小学校校歌も作曲（1953年）している。作曲の宇都宮氏は、八幡浜真穴中学校（2021年3月閉校）の校歌を作曲（1951年）している¹³。

歌詞

太平洋から宇和海を通じ流れてくる「黒潮」から始まる歌詞は、2行目で「群魚むれなの昔から」とつながる。「群魚」とは、魚の群れを意味するが、1879年（明治7年）、法通寺に開校した「群魚小学校」に由来し、学校に通ってくる児童が魚の群れのようなものである、とのことから命名されたとされている。すなわち、「群魚の昔から」とは、明治初期に開校した我が国の最初期の「小学校」を意味し、その歴史の長さ厚さを示している。

「まわりの山」から始まる第2節は、学校が建つ湊浦は三方を山に囲まれ（東部は仁田之浜方

面、北部は堂々山方面、西部は豊之浦方面) その山を背に海に面した比較的狭い平野部である。

第3節は「愛と誠」と小学校の校歌としてはいくぶん踏み込んだ内容とも思えるが、「世界の友と手をつなぎ」と、東京オリンピックを始め国際的な関係が活発化した当時の我が国の高揚感を表現している。

楽曲

曲は、ハ長調4分の4拍子各節が16小節、全体で48小節、四分音符=126と指定されている。とりわけ、注目に値するのは、冒頭に "Amabile" (アマビレ/愛らしく)、9小節目に "leggiero" (レジェロ/軽く、優美に)、15小節目に "con brio" (コン・ブリオ/活気を持って) の楽語が記載されていることで、それに対応するように、前半は順次進行が多く、9～13小節は跳躍進行、終結部は上行形の後、最高音 d^2 音に達する。mf, mp, f、クレシェンド、ディミヌエンドなどの強弱記号も極めて繊細に記載されている。作曲者に関する情報は入手不可能であったが、楽語や強弱記号を使用し微妙なニュアンスを要求していることから、高い音楽の素養があった人物であると思われる。

2.2 九町小学校(伊方(旧町見村)地区)¹⁴

2015年、二見小学校が閉校となり九町小学校に統合した。それ以前の九町小学校校歌「九町っ子」は、1969年に制定され、当時、音楽教諭であった辻弘^{ひろむ}氏により作詞作曲された。当然、歌詞にも「九町っ子」が現れ、吸収統合とは言え、新校歌制定が望まれたものと思われる。

新校歌は、作詞を旧町見村九町出身、同校および八幡浜市県立川之石高等学校の卒業生で、全国的に名を知られた俳人である坪内稔典^{としのり}(俳号は「ねんてん」)氏(*1944)によるものである。

作曲は、当時、愛媛県立川之石高等学校教諭であった若槻吉泰氏である。今回、作曲を委嘱され

るに至った経緯を手記の形での提供を受けたので原文のまま掲載する。

「平成26年度に新規採用教員として着任した愛媛県立川之石高等学校は、ちょうど創立100周年を迎えていました。その記念式典において、卒業生である俳人の坪内稔典先生が記念講演をされました¹⁵。

式典では吹奏楽部が演奏する場があったのですが、部員が13名と少なく演奏できる曲も限られてくるので、演奏曲を編曲し、私も奏者として演奏に参加しました。それを稔典先生が覚えてくださっており、九町小学校の作曲に御推薦いただきました。」¹⁶

歌詞

各節が「ハロー ハロー ハロー ハロー」と4回繰り返される印象的な始まりで、校歌としては斬新と言える。

曲は2節から成るが、テーマは第1節が「海」と第2節が「空」の「きらきら」光る様子が織り込まれており、明るく躍動感あふれる内容である。

第1節では、海、そして海からの風がテーマで、それが世界とを結ぶ象徴となり、「みんなの心」も結ばれる。宇和海側の湾に面した「海のほとり」にある学校を紹介している。

第2節は、「空のひかり」が世界を照らし、「みんなの心」も明るく、その大空の下にある九町小学校を歌っている。

作詞者自身が、この九町地域出身、および九町小学校の卒業生であり、故郷の美しい海に面したこの小学校の明るい雰囲気歌詞にしている。

楽曲

4分の4拍子変ロ長調、前奏を含め35小節である。歌唱冒頭の4回の「ハロー」をモチーフにした5小節の前奏に続き、8分休符から始まる躍動

感あふれる歌唱が始まる。単に主旋律をなぞるだけではなく、伴奏部分を3度の和音で重ねたり、歌唱が母音を伸ばす部分でピアノ伴奏の分散和音を取り入れるなど変化を持たせている。

主として順次進行の歌唱部分であるが、それゆえ、各節冒頭の分散和音の「ハロー」が印象的である。

和声的にも副属和音を多用した、昭和時代に制定された校歌とは趣が異なる。また、楽曲の最後では、*rit.* が表記され壮大に曲を閉じる。

以下は若槻氏による作曲する際留意した点に関してのコメントである。

「詩をいただいたときに衝撃的だったのは冒頭の「ハロー ハロー」。

この「ハロー」はそれぞれ3回リフレインされ、そこで閃いたのは「エコー」でした。後に稔典先生もこの「ハロー」については、「子どもたちが挨拶を交わす様」と言われていました。

1拍目と3拍目に八分休符を置きリズムの輪郭を出し、一回目の「ハロー」を「高」、二回目を「低」とし、「エコー」を表現しました。これに続く旋律は不思議と自然に出てきたというか、「導かれた感覚」というのが正確で、詩のリズム、言葉の高低、アクセントなど「詩の力」を感じた神秘的な体験でした。」

2.3 三机小学校（瀬戸（旧三机村）地区）

校歌は、1972年2月に制定された。作詞は有志となっており、作曲は田中政子氏である。

歌詞

第1節の「須賀^{すが}の森」は、瀬戸内海側の三机湾西側にある半島の突き出た部分に位置する森である。湾の形がハワイの真珠湾に類似していることから太平洋戦争開戦前に海軍の潜水艦訓練基地として真珠湾攻撃の練習に使用されたとも言われ、現在の須賀公園にはその記念碑が存在する。歌詞に

ある松の他、様々な木々で生茂る南国的な雰囲気のある区域である。その「松の緑」を「わが心」と表し、「明るく直くすこやかに」と歌っている。

第2節は、「瀬戸内の海のおおさはわが心」、第3節は、「権現^{ごんげん}の緑の光はわが心」と、自然と児童の心とを関連させた歌詞となっている。「権現」とは、三机地区の南西に広がる「権現山」を表すが、この地域の象徴である。

楽曲

へ長調4分の4拍子、前奏間奏後奏を含め65小節の楽曲である。極めて詳細に楽語、強弱記号、フレージング、アーティキュレーションが書き込まれており、非常に音楽的な内容の濃い校歌である。

冒頭には、「中庸の速さではきはきと」(*Allego moderato e Risoluto*)と記されている。曲中、*mp*, *mf*, *f*, *rf*、クレシェンド、ディミヌエンドなどが細かく記され、それは伴奏パートも同様で単に旋律をなぞるだけではない極めて音楽的な楽曲と言える。和声的にも単なる主要三和音の使用ではなく、副三和音や副属和音、借用和音など様々な色彩感溢れる。途中、歌唱の10小節目は4分の2拍子となり、また、アクセントを表記し「三机小学校」の歌詞を際立たせている。

後奏では、滑らかな順次進行のあと、同主調からの借用6度和音とリタルダンドで非常に印象的な終わり方をさせている。極めて芸術性の高い校歌と言える。

2.4 大久小学校（瀬戸（旧四ツ浜村）地区）

大久小学校は学制改革に伴い1947年に成立、その後、田部小学校（1989年）、神崎小学校（1990年）、川之浜小学校（2003年）が大久小学校に吸収統合された。大久小学校は、1974年に創立百周年を迎え¹⁷、その同年10月に校歌が制定された。

作詞は有志（一部補作）、作曲は愛媛県内の学校の校歌を数曲残している阿部^{じゅんけい}淳敬氏である。阿

部氏は、旧伊方町有寿来小学校（1982年）、旧三崎町串小学校（1980年）、与侈小学校（1983年）、旧保内町川之石小学校（1968年）などの校歌を作曲している。また、氏は1944年度愛媛師範学校本科第一部を卒業（戦時のため半年早めて）、旧保内町、旧三瓶町の小中学校、伊方中学校他で音楽教諭を務めた後、1977年、有寿来小学校に校長として赴任した。

歌詞

宇和海側の海岸線に位置する大久地区にある大久小学校のホームページには、「～ 日本一海に近い みんなの学校 ～」との記載があり、実際校庭は海に面している¹⁸。

「宇和の海原 白い浜」で始まる第1節では、海から匂う「潮の香高い学校」で明るく伸び伸び学ぶ児童を表現している。

第2節に現れる、「亀がくぼ」は大久地区の現在「佐田岬リゾート」（大和ハウス工業ロイヤルシティ佐田岬リゾート）が立つ付近の牧草地である。大久地区は明治末期より三崎牛と称される牛の放牧で栄えており、高茂地区（1947年）他、入植地も存在した。もともと亀ヶ窪は大久地区の共有地で面積も150町歩（1.5km²）以上あったが、1960年ごろより放牧牛の数は減少し、1970年代に入るとほとんど姿を消した¹⁹。したがって、校歌制定期には、「緑豊かな亀がくぼ」には象徴であった放牧牛はおらず、リゾート開発前の森林が生い茂っていた。また、大久地区の海岸では、1960年代まで牛の放牧が行われており、のどかな様子が当時の写真や記録で残されている²⁰。

「幸成園」は、大久小学校に旧校舎が存在した当時、敷地内にあった植物が豊かな庭園で²¹、現在は、「幸成園跡」という碑のみが残されている。

海に面した大久地区の自然の豊かさ、児童が明るくのびのび楽しく学び、遊ぶ様子を歌った校歌である。

楽曲

へ長調4分の4拍子、前奏部分8小節を含め、各節16小節、全体で40小節（2節）の楽曲である。付点リズムと分散和音進行を用い、躍動感を表現している。ピアノ伴奏譜では途中から二声となるが、校歌の公式楽譜では単声である。

2.5 三崎小学校（三崎（旧三崎村）地区）

2.5.1 校歌

2011年に二名津小学校が、2014佐田岬小学校が統廃合し現在の三崎小学校となった。

三崎小学校の歴史は古く、1874年（明治7年）に創立したこの地域で最も早く開校した小学校の一つである²²。場所は、伝宗寺住職の家の一室におかれ²³、当時の小学校によく見られるように、各学年共学で教師は一人、生徒の年齢もまちまちで、江戸時代の寺子屋と大同小異のものであった、と記されている²⁴。教育内容は、商売往来²⁵、庭訓往来²⁶、実語教²⁷、やや進んだ者は、中庸、論語、孟子などを学んでいた²⁸。

その後、1877年にヲミド地区（現在三崎札幌地区）、現在の場所（三崎907）に移転したのは、1917年である²⁹。

校歌は、作詞山内貞行氏、作曲成本信夫氏である。成本氏は八幡浜市立日土東小学校の校歌（1956年制定）も作曲している。

三崎小学校校歌の制定年は不明であるが³⁰、創立80周年（1954年）記念誌には校歌が掲載されていることから、新学制制定に伴う校名変更（1947年）から1954年までの制定であると思われる。

歌詞

佐田岬半島の大きく西に突き出した地のため、古来、漂着も含め九州方面からの人の出入りがあったものと推察されている。藤原純友(*843??, †941)³¹の軍勢が砦を築き、多くの海賊が住み着いたとも言われ、後に壇ノ浦の戦いに破れた平家の落人が漂着したとの言い伝えが正野地区などに

遺されている。このような歴史背景より、第1節は、「昔倭寇の基地となり」と始まり、「靡く旋風が南洋まで」達したと歌っている。この歴史に誇る三崎地区の小学生には「使命」があると閉じる。

第2節は、「潮の香り」が「ダイダイ」に当たると始まる。周辺は潮流渦巻く好漁場で、一本釣りのアジ、サバのほか、イセエビ、アワビ、サザエ、ウニなどの高級食材の生産地と知られ、佐田岬近くに蓄養場も存在している。また、農業では、明治初期に導入された夏みかんの栽培、その後、全国有数の産地となった。現在では、甘夏柑やサンフルーツ、さらに清見タンゴール、伊予柑などの晩柑類が主な栽培品となっている。このように、海と急斜面で栽培されている農作物を冒頭で歌い、「富と幸とに恵まれ」ている地域を表現している。

第3節は、児童が足並み揃え勉学に力強く打ち込み、「村」（制定当時）の前途を担う子どもたちの姿を歌っている。

第4節は、「豊予の海」に希望がある、と、対岸までフェリーでわずか1時間余りの九州との関連を表現している³²。

楽曲

変ホ長調4分の4拍子、各節16小節、3節までで48小節の楽曲である。入手できた楽譜は原作ではなく、幾代にもわたりおそらくは音楽担当教員により写譜されてきた楽譜であるものと思われる。明確には確認不能であるが、以前は、別の楽譜を使用していた、という証言もあった。したがって、掲載した楽譜は、通常、歌唱時に使用される伴奏譜である。

歌唱パートの音域は、変口音から二点変ホ音の1オクターブと完全4度で、小学校の校歌としては広いと言える。付点音符を多用した躍動感あふれる楽曲である。

伴奏は旋律をなぞった右手パートと、基本単音かオクターブのユニゾンという単純なものである。

2.5.2 「百年賛歌」

「百年賛歌」は、三崎小学校開校100年を記念して、1974年に作られたものである。作詞は当時校長の池上馨氏、作曲は当時教頭であった阿部淳敬氏である。

制定当時在学中であった阿達氏によれば、「小学校6年生の時、ちょうど開校100年で、当時の池上校長の詞に阿部教頭が曲をつけた校歌を児童が歌ったが、後にも先にも歌ったのはこの学年とその下の学年のみであったと思う。」とのことである³³。

歌詞

「明治七年開校の」で始まる、三崎小学校百年賛歌は、第1節で当時教室で勉強した「わたしら」（児童たち）の本読む声ははずんで聞えている。読んでいたのは、記述の通り、様々な教科書で、学習が進んだ者は論語まで読んでいたという。百年も前の昔からこの地で熱心に学んでいた子どもたちについて回想している。

第2節の「伽藍の峰」は、三崎中学校、三崎高等学校の歌詞にも現れる三崎地域の裏手にそびえるこの地の象徴である。その麓の学校の校庭で児童たちが百年も前の昔から「かけ足」をし「運動」していた様子を表現している。

第3節の冒頭「鎮守の森」は、伝宗寺の森を指すと思われる³⁴。三崎小学校は、既述の通り1874年に伝宗寺で読み書きの教室を開いたのが始まりで、この讃歌の歌詞にも取り入れられたと考えられる。なお、当時は、神仏混淆であり、寺が「鎮守の森」であっても矛盾はない。

第4節は、佐田岬半島の突端部に位置する三崎地域から対岸の九州佐賀間までは30km程度で、現在、フェリーでもわずか70分の距離である。「九州四国を結ぶ町」三崎町は宇和海からの黒潮が寄

せるみかんの花香り、百年も昔から発展を祈ってきた人々の心の歌が聞こえると締めくくっている。

3. 伊方町内の中学校

3.1 伊方中学校（伊方地区）³⁵

旧伊方中学校、および旧町見中学校は共に戦後の学制改革時、すなわち1947年に開校した。旧校歌は伊方中学校は1949年、町見中学校は1956年に制定されている。伊方地区は八幡浜にも比較的近く、人口の減少は他の二地域ほどではなかった。とはいえ、1962年には生徒数は頂点を迎え（伊方中学15学級762名、町見中学校は11学級195名）、その後は漸減してゆき、1995年には伊方中学校195名（対1962年比 -72.7%）、町見中学校（対1962年比 - 85.7%）で、すでに1980年代半ばより規模適正化の議論が行われていた。

結果、1996年に相互に統合案に調印し、いずれの学校も閉校とし、現在の伊方中学校の場所に新生伊方中学校を開校することが決まった。その結果、校章、校訓、そして校歌も新たに制定する必要がある、1998年の開校と同時に新校歌が披露された。他の学校の場合統合廃合で校歌の変更はあるにしても、両校を一旦閉校にして新たに同名の学校を開校するという多少わかりにくい成立の経緯がある。これは、所在地が伊方地域であること、また、元来町見地区は独立した村であり、吸収合併という方法を好まなかったことが原因の一つと考えられる³⁶。

校歌は、作詞が旧町見村（現伊方町内）九町出身の坪内捨典氏³⁷、作曲が河野美砂子（*1956）氏である。河野氏は京都市立芸術大学音楽学部のピアノの非常勤講師として勤務され、ピアノ奏者であると同時に歌人としても著名である。

作曲者の河野氏によれば、作詞者の坪内氏が旧知の河野氏を作曲者として推薦したとのことである³⁸。ピアニストである河野氏は、同時に歌人であり、1995年には角川短歌賞を受賞、その関係で坪内氏とも懇意になったとのことである³⁹。「坪内氏

は著名な作曲家ではなく、身近でかつ詩のことをよく理解している人物を望んだのではないか」、と河野氏は述懐している⁴⁰。

歌詞

「友よ」と題されたこの校歌は、既述の通り伊方、町見両中学校の同時閉校に伴い新制伊方中学校の校歌として新たに制定されたが、ここでも作詞者の坪内捨典は、九町小学校の校歌同様「きらきら」という語句を主たるモチーフにしており、「風」、「波」、「石^{つわ}路^{ぶき}」は「きらきら」と、各節冒頭で歌わせている。

第1節は続いて、「伊方の空は宇宙のひかり」、第2節は「伊方の海は世界の響き」、第3節は「伊方の土ははぐくむいのち」と、周囲の自然ではなくむしろ両中学校の統合、あるいは生徒の統合を目指しているように感じ取れる。

第3節に現れる石^{つわ}路^{ぶき}は、伊方町の町花であり、1975年に制定された。第3節でこの植物を取り上げたのは、中学校統合の象徴としての意味のあるように思える。

なお、瀬戸町においても、1984年、「自然の花として」石路が町花として制定されており、合併後も踏襲された。同町は、このほかに、「普及する花として」すみれが、「花木として」さざんかが同じく町花に制定されている。

楽曲

ニ長調4分の4拍子、前奏間奏後奏を含め50小節、各節は18小節の楽曲である。歌唱部分は前半が順次進行の多い滑らかな曲調であるが、ピアノ伴奏の左手パートが8分音符の分散和音を奏で華やかさを与えている。後半は、力強い旋律線を前半と同じ音形の左手パートが支え、統一感を持たせている。一貫して流れるハーブを思わせる左手伴奏音型が印象的な美しい校歌である。作曲者の河野氏によれば、開校時の式典で校歌を披露した際に

は、御自身でピアノパートを演奏した、とのことである⁴¹。

3.2 瀬戸中学校（瀬戸地区）⁴²

平成の大合併前の瀬戸町時代の1994年に、旧三机村地域の三机中学校と旧四ツ浜村地域の四ツ浜中学校が統廃合し、瀬戸中学校が新たに開講した。同時に校歌も制定されたが、作詞は初代瀬戸中学校校長である石見利仁氏（†1999）作曲は高重利恵氏によるものである。

ところで、石見氏の校歌について、「先生が歌詞に込めた願いや想いを噛みしめながら校歌を歌い（中略）先生の熱い思いや優しい人柄がよく表れている歌詞でした。⁴³」という記述を発見し、やはり校歌はその人となりを表すだけではなく、それを歌っていた児童生徒にも一生忘れられない歌唱曲であることを再認識した。作曲の高重氏に関しては情報は入手できなかった。

歌詞

全ての節の第2フレーズで、「われらが集う丘の上」の歌詞を用いて統一感を持たせている。

第1節は伊予灘側の三机湾の潮の響きを聞きながら坂を登り「われらが集う丘の上」に登校する生徒の様子を、そして真理を極める瀬戸中の生徒が明日の故郷を担う瀬戸中学校の生徒を歌っている。

第2節は、自然豊かな学校周辺の「木々の息吹を感じつつ」、第1節同様「われらが集う丘の上」に登校し、友情を深める生徒を、第3節では空の流れる雲を追いながら丘の上にある学校に登校し、「回る風車に夢託し理想求め」る瀬戸中が、明日の世界を拓くと歌っている。

「回る風車」に関しての補足として、瀬戸町時代の風力発電の取り組みが指摘できる。1987年佐田岬半島を縦走する国道197号線が全線開通し、半島中心部の尾根の上を訪れる観光客も多くなり、瀬戸町は国道沿いに国道沿線での中継拠点の整備を

計画、翌1988年、農業公園の整備に着手した⁴⁴。これは、農林水産省の新農業構造改善事業の認定を受け、農林水産物の展示即売施設、風力発電施設とこの電力を利用する温室、さらにふれあい広場を配置し、農業と観光の拠点作りをしようとするものであった。「瀬戸町農業公園」内に1991年建設された風車は、当時としては日本最大規模で高さ30m、羽の長さ14m、風速4.2mで起動、9.3mで定格出力100kwで、町のシンボルとして知名度アップや誘客に大きく貢献することになった⁴⁵。すなわち、町のシンボルとなったこの風車が、その直後に開校した瀬戸中学校の歌詞の題材となったのである。

その後、2003年、「瀬戸ウインドヒル発電所」（1000kW × 11基）が、2009年には、「ユーラス瀬戸ウインドファーム」（2000kW × 4基）が建設され、文字通り風車の町となった。

なお、瀬戸地区だけではなく、伊方町全体で、現在、上記2企業以外に伊方町風力発電所（2005年850kW風車×2基）、佐田岬風力発電所（2006年、1000kW風車 × 9基）三崎ウインド・パーク発電所（2007年、1000kW風車×20基）伊方ウインドファーム発電所（2010年、1500kW × 12基）と⁴⁶、事業主体が伊方町、第3セクター、民間合わせて6企業が風力発電を行っている。全国的には原子力発電所の町として有名な伊方町であるが、実際には東日本大震災以前から積極的に風力発電に取り組んでいる。

楽曲

変口長調4分の4拍子、前奏4小節を含む全体で40小節（各節12小節が3節）の楽曲である。最後の4小節を前奏に付け加えた楽譜も慣用版として伝承されている。

冒頭から付点リズムで、弾む印象の4小節のフレーズは主和音にもどり、第2段目からが属和音で始まり、最終行が主和音の第3音ニ音で、最高

音となり比較的長い音価の旋律で力強く楽曲を閉じる。

3.3 三崎中学校（三崎地区）⁴⁷

1947年、新学制に伴い、旧三崎小学校の一部を引き継ぎ三崎村立三崎中学校として開校した。校歌制定は1952年で、作詞は当時の校長である末廣重之氏（在1950～1955年）、作曲は清家嘉壽恵氏である⁴⁸。

末廣氏は、1947年三崎村立二名津中学校で初代校長勤めた後、三崎中学校第2代校長として1950年赴任した。三崎地区出身の教育界の重鎮であり、1999年、三崎町の名誉町民に認定された⁴⁹。

作曲の清家氏は、愛媛大学師範学校出身で、同大学教育学部助教授で、二見小学校、旧伊方中学校、町見中学校（以上旧伊方町）、三机中学校（旧瀬戸町）、串中学校、三崎高等学校（以上三崎地区）をはじめ県内の多くの学校の校歌を作曲している⁵⁰。

歌詞

佐田岬半島の「のぶところ」である先端部に位置する旧三崎町は、三崎小学校の項でも述べたとおり、明治期よりみかん栽培が活発に行われていた。第1節では、「みかんの花の匂う里」で育つ生徒たちがそのみかんの若木同様伸びていく様子を表現している。

第2節は、「伽藍の峯」の下学ぶ生徒たちが心正しく過ごしていくことを願い、第3節で、岬にある燈、すなわち輝く灯台の光と、自由の鐘が鳴ると表している。「四海の友^{しかい}」、すなわち国内、あるいは世界の友に幸あれと祈る生徒を、第4節は、生徒たちが肩を組み新しき世界を築き、望みがあふれる「三中生」を歌い上げている。

また、各節第3行で「のびる若木の のびる若木の」（第1節）、「働く花の 働く花の」（2節）、「祈りつ学ぶ 祈りつ学ぶ」（第3節）、「望みあふれる 望みあふれる」（第4節）とリフレインで

統一感を持たせているのもこの校歌の大きな特徴と言える。同時に、各節を「三中生 三中生 三中生 われら」と、共通行で締めくくっている。

楽曲

へ長調4分の2拍子、各節22小節の楽曲である。2拍子が付点音符が印象的な行進曲を思わせる曲調で、細かな音価が続き躍動感あふれる部分の後、「三中生」の部分で高らかに曲を閉じる。

掲載の楽譜では、「すこやかに」（第1節）、「みはつよく」（第2節）の部分で、スタカートが記載されており、曲に変化を与えている。

4. 愛媛県立三崎高等学校

1951年1月1日創立の県立三崎高等学校は、同月16日に生徒246名、教員が6名で開校した。初期は夜間の定時制で、当初は三崎村立三崎中学校を間借りをしながら授業を実施していた。1954年、三崎高等学校校舎が三崎小学校および三崎中学校に運動場を挟み向かいあう形で建設され、運動場は3校が共有していた⁵¹。1959年、現在存在する標高58メートルの高台に移転した。

校歌は、1953年12月1日に制定され⁵²、作詞は末廣重之氏、作曲は清家嘉壽恵氏である。三崎高等学校の初代校長末廣重之氏は、三崎出身の教育者で、三崎中学校校長とこの新設高等学校校長を兼任した⁵³。氏は、同校以外に、近隣の二名津（ふたなづ）中学校、串中学校、正野小学校などの校歌の作詞を行っている。

歌詞

第1節の冒頭で、「瀬戸の内海 宇和の灘」と佐田岬半島先端の南北両側に広がる海を歌い、豊予海峡の渦潮を「速水の渦」と表現している。瀬戸内海と宇和灘の境目で、潮流が速いうえ岩礁暗礁も点在しており、渦潮が発生する海の難所で三崎町を囲む海の様子を表している。「渦に漂う香り」は「花橋」のものであり、この花は三崎高校

の象徴である⁵⁴。また、三崎町の町花は「たちばなの花」であり、この花は地域の象徴でもある。さらに、校歌制定前年の1952年3月1日に夏みかんの花（花橘）をモチーフにした校章が制定されている⁵⁵。橘は、日本に古くから野生していた日本固有の柑橘類である。現在、同校校庭にはミカンの木が植えられており、その木に初夏の時期に咲く花が橘の花である。

第2節は、「誠集翁^{せいしゅうおう}の眠る地に」と始まるが、「誠集翁」とは明治時代に三崎町に夏柑（夏みかん）栽培を広めた宇都宮誠集^{のぶちか}（*1855, †1907）氏のことである。江戸時代末期に宇和郡三崎浦松（現伊方町松地区）に生を受けた同氏は、暖かい気候の三崎は夏柑の栽培に適していると確信し、村民に栽培するよう説いて回り、その後、村内一円に、さらには佐田岬半島全域に夏柑の栽培が広がった。今なおその功績は褪せることなく、誠集は「夏柑の父」として地元の名士として崇められている⁵⁶。彼の「慈愛の光」に照らされ、「真理の道を一筋に」探究する希望あふれる生徒たちを歌っている。

第3節は、三崎中学校の校歌にも現れる三崎地区の裏手にそびえる伽藍山を仰ぎ、理想高く勉学に勤しむ生徒を、第4節は、その伸びていく若き生命を、三崎高校の前途を「栄えあれ」と結んでいる。

この校歌は地元を代表する人物や植物、自然などを歌いやすく耳に残る旋律で表現した極めて洗練された楽曲である。

楽曲

へ長調4分の2拍子、前奏を含め全体で140小節、各節は32小節（第4節まで）である。行進曲調で付点リズムを多用した元気あふれ躍動感ある楽曲である。各フレーズの合間のピアノ伴奏右手の上行型あるいは下降型の音階風挿入句が印象的で、全体的に音楽的にも優れた校歌である。ピアノ

伴奏は難易度は高くないものの、極めて効果的な書法であると言える。

5. 校歌の作曲家「清家嘉寿恵」氏のこと

愛媛県立三崎高等学校、および伊方町立三崎中学校校歌を始め、閉校になった、旧伊方中学校、二見小学校、町見中学校（以上旧伊方町）、三机中学校（旧瀬戸町）、串中学校、三崎高等学校（以上三崎地区）の校歌の作曲者である清家嘉寿恵氏は、愛媛県内の小中高等学校の校歌を作曲（今回確認できた県内の校歌のみで42曲）している⁵⁷。本稿は、伊方町内の現存する小中高等学校の校歌がテーマであり、その範疇外になるが、これだけ多くの学校の校歌の産み出したにもかかわらず、現在ほとんど忘れ去られてしまっている作曲家である清家氏を取り上げ、一章を氏の功績を讃えるとともに、その再評価へのきっかけに寄与したいと考える。清家氏は、校歌の作曲以外でも様々な地域に密着した形での作曲活動を行っており、例えば、1961年には、伊予銀行（伊豫合同銀行）創立20周年を記念して制定された行歌（社歌）の作曲を担当している⁵⁸。また、1958年制定の「美川村民歌」、および「美川音頭」（現久万高原町）なども氏の作である。

ここでは、極めて情報量の少ない中、氏の経歴と業績を、愛媛の音楽界との関連で概観する。

経歴・業績

清家嘉寿恵氏は、1938年（昭和13年）、愛媛師範学校の講師となり、1948年、文部教官三級、新制大学設立後も愛媛大学教育学部の作曲の講師、1957年より助教授として、1971年までその職にあった。

清家氏は、愛媛師範学校在学中である、昭和初期、松山に「松山混声合唱団」を設立して、愛媛県初の合唱団として県下における合唱運動の拠点とし、数々の合唱音楽を紹介した⁵⁹。大正時代末期から昭和十年代半ば（1920年代～1940年ごろ）まで

は、松山市内で学生による活発な音楽活動が行われ、これは、清家氏や、松山中学校に赴任した山内一郎氏、松山商業学校の橋本一氏らによる学生たちへの指導の成果が表れた結果である。

また、器楽分野にも力を注ぎ、1937年設立の「松山中等学校吹奏楽連盟」の常任理事の一人（常務理事は愛媛師範学校の栗田國彦氏）に就任した⁶⁰。同連盟は、「現下の時局に鑑み澆刺たる吹奏楽によって青年学生の士気を鼓舞し剛健純真なる情操を養い団体訓練によって和協精神を発揚し音楽報国の実を挙げんとする目的によるもの」⁶¹、会員は松山中学校、松山北中学校、松山商業、松山農業、愛媛師範学校の在籍者で、各校生徒二名を委員とし、事務所は愛媛師範に置くものであった。1937年当時の記録によれば、「十一月十五日午後三時半までに東雲神社前に集合して、武運祈願、感謝報告、軍歌合唱、皇居遥拝等を行い大街道、港町等を行進」し、「十一月廿三日は合同演奏会を開催」する予定になっている⁶²。活動は1944年ごろまで継続されたとされているが、戦火が激しくなるとともに学生達は吹奏楽から遠ざかっていった。なお、1939年12月23日、松山中学校で開催された「白衣の勇士に捧ぐ」と題する音楽会での演奏が公式の最後の演奏である⁶³。同時期の様子を伝えるものとして、有寿来小学校校歌などの作曲者で、小学校校長を歴任した愛媛師範学校卒業で音楽を専門としていた阿部淳敬氏の回想では、戦時中、松山市若草町師範学校の校舎で、ご自身は在学中、チューバを演奏し、戦時下で半年前に繰り上げ卒業し教壇立った、とのことである⁶⁴。

戦後、1949年には、ラジオ放送の演奏会形式によるジョルジュ・ビゼー作曲のオペラ「カルメン」の上演では、清家氏は松山放送合唱団を指揮している⁶⁵。

清家氏が助教授に昇任した前年、1956年、城多^{きた}又兵衛氏（*1904，†1979）が東京芸術大学音楽学部声楽科教授および同大学附属高校校長を突然辞任し、愛媛大学教育学部の教授として赴任した。

城多氏は、現在でも使用されている「コールユーブンゲン⁶⁶」や「コンコーネ⁶⁷」、「ダンノーゼルのソルフェージュ⁶⁸」の編者として全国的に著名な作曲家・音楽教育者で、声楽曲合唱曲を中心に作品も多い。そのような著名な音楽家が愛媛大学教育学部の音楽部門教授に着任したことにより、特設音楽科（特別教科音楽教員養成課程）設立の話が持ち上がった⁶⁹。ここでは清家氏に関する記述を見出すことはできないが、氏も大いに尽力したと思われる。1959年、全国8番目の特設音楽科として、第1期生27名を入学させた⁷⁰。

同時期、1957年ごろ、「愛媛県音楽教育研究会」が設立され、城多又兵衛氏が初代会長を務めるが、城多氏は1960年に愛媛を後にし、清家氏が第二代会長を引き継いだ。1960年、愛媛県教育研究協議会の創設に伴い、翌年、所属する小・中学校教員のみで構成する組織として改組され、1964年、同会は、愛媛県教育研究協議会音楽部会として発展的に解消した。したがって清家氏の会長職は1960年、あるいは61年までである⁷¹。その後、1970年度末に退官するまで愛媛大学教育学部助教授として勤務していた。

6. 総括

伊方町内では、30以上あった学校が現在では小中高等学校合わせて9校となった。閉校になった学校の校歌は、もはや忘却の彼方へと消え歌われることはなく、また、閉校から数十年、あるいは十数年を経て、歌詞のみがかるうじて町誌などに掲載され伝承されていることが多い。すなわち、歌詞はある程度は伝えられていても、楽譜は通常は歴代の音楽教師のみに手渡して伝えられ、閉校とともにその役割を終え廃棄されてしまう運命にあることは想像に難くない。今、その意味ではある程度関係者が存命であり、伝承資料も残されているという意味では、未来へとその存在を伝えることのできる最後のチャンスであると言える。既述の二編の閉校になった学校についての調査報告は、

少なくとも消え去った校歌を未来へと伝える一助になったと自負している。

また、前々回、前回、そして今回と校歌を調査する中、「愛媛の校歌の母」とも言える人物を知ることになった。愛媛大学教育学部音楽講座助教授であった清家嘉寿恵氏である。愛媛師範学校を卒業し、同校教員を勤め、戦前戦中戦後を通じ、愛媛の音楽界をリードし、とりわけ合唱分野で大きな足跡を残した同氏は、県内の数多くの学校校歌を作曲しその名を残している。1970年度末をもって退官され、現在では、校歌の作曲者としての名を残している氏であるが、おそらく全国に同じような例があることは容易に想像できる。地方における戦前戦後の音楽界、大学教育、あるいは地域の音楽教育、そして校歌の歴史を現在今一度見直すことは、先人の築き上げた歴史を未来につなぐ重要な研究であるように思う。特に、愛媛県では過疎化の進む地域も多く、実際、戦後に限っても400数十校が閉校し、校歌が消え去っていきこうとしている。それは、校歌の消滅であるだけでなく、それぞれの地域文化のある一部分、教育や歴史の消滅とも言える。今後のさらなる当該分野の研究に期待したいと考えている。

なお、今回の研究にあたり、伊方町の関係者の方々、とりわけ、伊方町立三崎小学校非常勤講師阿達雅子氏、愛媛県立三崎高等学校教諭大西純氏には楽譜資料や情報収集で大変お世話になり、また、町内の各学校には楽譜資料の提供を依頼し、またその掲載を快諾いただいた。さらに、伊方中学校校歌の作曲者河野美砂子氏には多忙な中、メールでの情報収集を行わせていただき、貴重なお話を伺うことができた。九町小学校校歌の作曲者である愛媛県立松山西中等教育学校教諭若槻吉康氏には、詳細な作曲の経緯と手法や感想を手記の形でいただいた。本稿のような研究は、このような地元の関係諸氏あるいは機関の協力なしには遂行することができない。ここに深く感謝の意を表したい。

参考文献

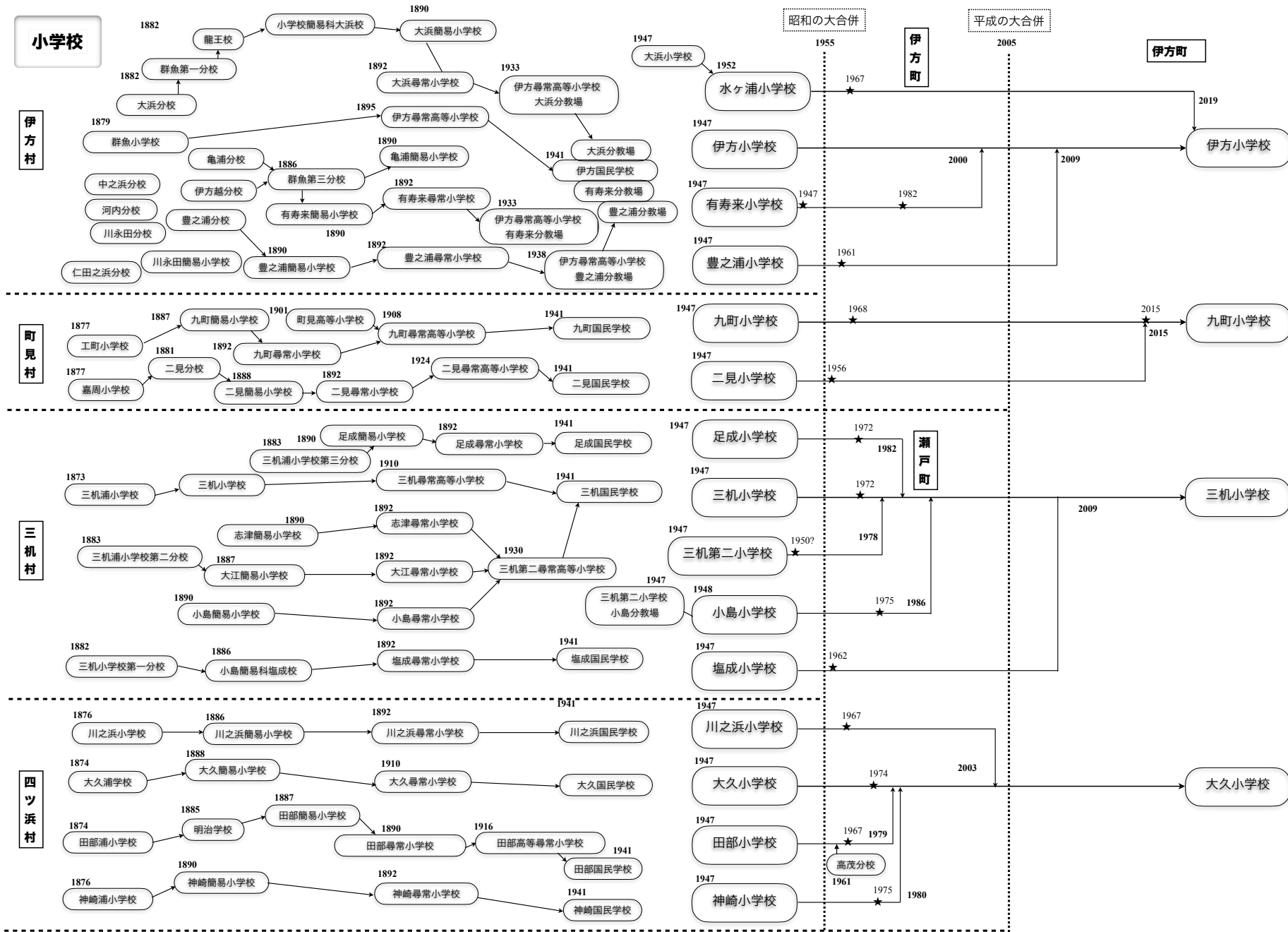
- 市川克明, 「旧瀬戸町、旧三崎町の閉校になった小中学校の校歌について」, 地域創生年報第13号, 2018, pp. 102-127
- 市川克明, 「旧伊方町の閉校になった小中学校の校歌について」, 地域創成研究年報第12号, 愛媛大学地域創成研究センター紀要, 2017, pp. 28-44
- 井上善一, 「瀬戸町における風力発電事業の取り組み」, 風力エネルギー利用シンポジウム 第26巻, 2004, p. 70-75
- 「伊方町町勢要覧」, 伊方町総合政策課, 2021
- 「続伊方町誌」, 続伊方町誌編集委員会, 伊方町 2005
- 「戦後・西宇和教育史」, 戦後・西宇和教育史編纂委員会 1992
- 「伊方町誌」, 伊方町誌改訂編集委員会, 伊方町 1987
- 「愛媛県史 芸術・文化財」, 愛媛県史編さん委員会, 愛媛県1986
- 「瀬戸町誌」, 瀬戸町誌編集委員会, 瀬戸町 1985
- 「三崎町誌」, 三崎町誌編集委員会, 三崎町 1985
- 「伊方町誌」, 伊方町誌編集委員会, 伊方町 1968
- 「愛媛県学事関係職員録」昭和24～55年度, 愛媛県小中公聴会 1949-1980
- 「愛媛県教育関係職員録」昭和23年度, 愛媛県教員組合 1948

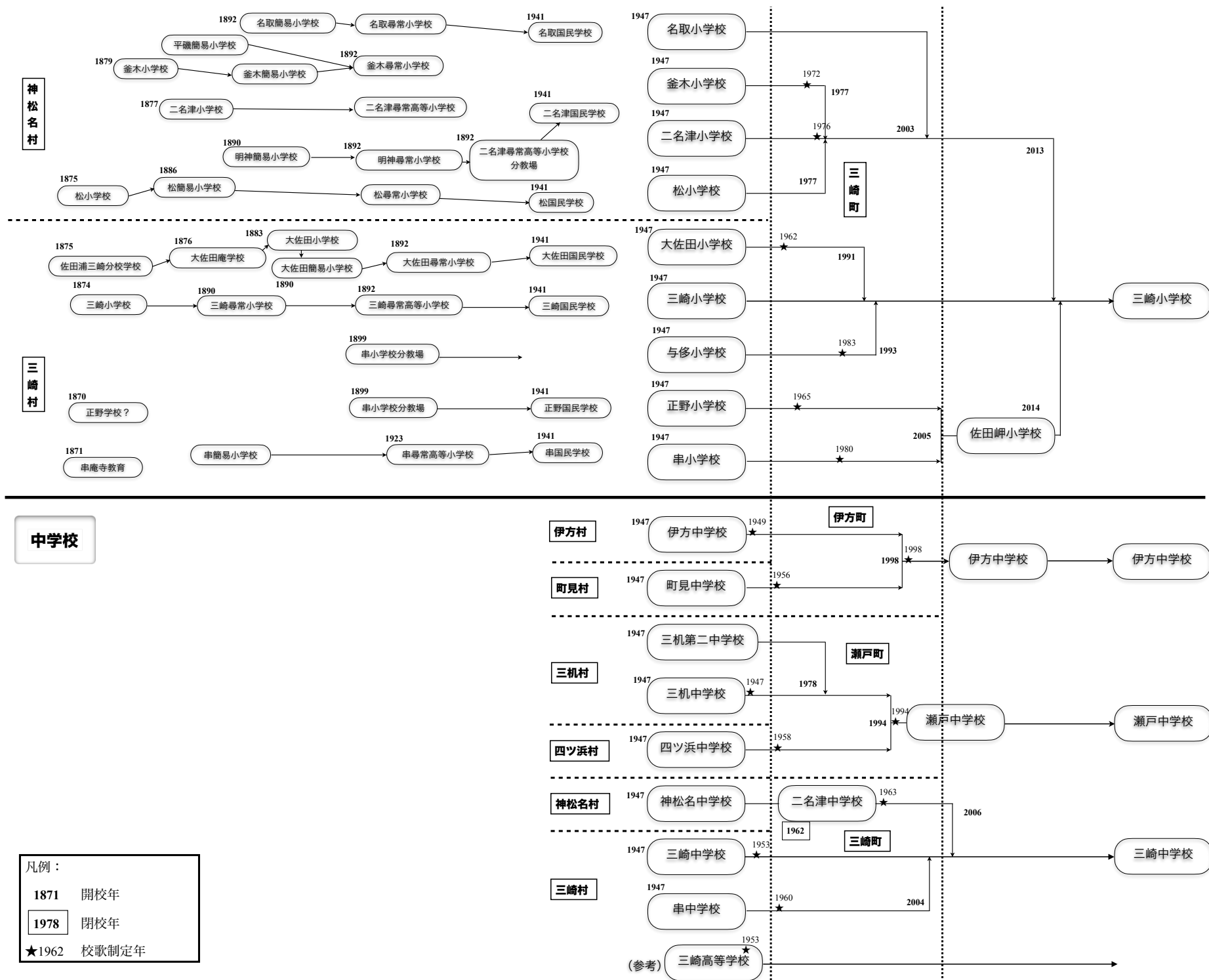
- 1 旧町名が地区名となっており、八幡浜市側から、「伊方地区」、「瀬戸地区」、「三崎地区」を称され、本稿でもこの名称を採用している。
- 2 2022年7月1日推定人口。
- 3 資料1、2を参照のこと。
- 4 市川克明, 「旧伊方町の閉校になった小中学校の校歌について, 地域創成研究年報第12号, 愛媛大学地域創成研究センター紀要, 2017, pp. 28-44
- 5 市川克明, 旧瀬戸町、旧三崎町の閉校になった小中学校の校歌について, 地域創生年報第13号, 2018, pp. 102-127
- 6 資料4を参照のこと。楽譜は全て対象学校より提供していただき、オリジナルに近い楽譜であると思われるものはそのまま掲載、汎用あるいは慣用楽譜として書き換えられてしまっていると思われる場合には、新たに執筆者により作譜を行なった。また、全ての学校より本稿での校歌楽譜使用の許諾を得た。
- 7 市川 (2017) , pp. 28-29、および市川 (2018) , pp. 102-103、および資料2を参照のこと。
- 8 資料2を参照のこと。
- 9 藤岡謙二郎, 「岬半島の人文地理」, 大名堂 1966, p. 3
- 10 資料2、3参照のこと。
- 11 市川 (2017) , pp. 30-35 参照のこと。
- 12 市川 (2017) , pp. 30-31 参照のこと。
- 13 <https://maana-j.esnet.ed.jp/schoolsong>, 2022.8.31 閲覧
- 14 市川 (2017) , pp. 31-32, pp. 34-35 参照のこと。
- 15 愛媛県立川之石高等学校創立百周年記念行事、2014年10月31日、11月1日。
- 16 作曲者若槻吉康氏による。
- 17 大久浦小学校は1874年の創立である。百周年記念式典は、1975年に挙行された。
- 18 <https://ohku-e.esnet.ed.jp>, 2022.8.13 閲覧
- 19 <https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:1/29/view/3896>, 2022.8.13 閲覧
- 20 <https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/34/view/4877>, 2022.8.31 閲覧
- 21 2022.8.18 現大久小学校校長による。
- 22 「三崎町誌」, p. 563
- 23 「三崎町誌」, p. 579
- 24 「三崎町誌」, p. 563
- 25 商業に必要な語彙やそれに関する知識、商人の心がまえを説いた、主として商人に対して作られた初等教科書。
- 26 往復の手紙の形式をとった、江戸時代の寺子屋の習字や読本として使用された初級教科書の一つ。
- 27 庶民のための教訓を中心とした初等教科書。
- 28 「三崎町誌」, p. 579
- 29 広報「いかた」2009年4月号 No. 49, 伊方町 2009, p. 7
- 30 三崎町誌、三崎小学校80年、および100年記念誌にも記載なし。
- 31 本稿では、生年を*、没年を†で表記する。
- 32 1969年、日本道路公団(当時)から委託を受け、佐賀関港-三崎港間のフェリー航路開設。
- 33 2022.8.17 メール返信。
- 34 現在の三崎小学校の裏手の高台にある臨濟宗妙心寺派の寺院。境内には、推定樹齢約1000年の2本の大クスノキがあり、現在でも大きく枝葉を広げている。
- 35 市川 (2017) , pp. 36-38 参照のこと。

- 36 同様の例が町見地区に新制中学開校の際、所在地をどの地域にするかで九町と二見地域の確執があったようである。市川（2017），pp. 36-38
- 37 2.2 九町小学校参照。
- 38 メール問い合わせ 2022.8.16返信
- 39 2022.8.13 メール返信。
- 40 2022.8.13 メール返信。
- 41 2022.8.13 メール返信。
- 42 市川（2018），pp. 103-104 参照のこと。
- 43 文教月報第507号，愛媛県教育会，2019.6.1
- 44 井上善一，「瀬戸町における風力発電事業の取り組み」，風力エネルギー利用シンポジウム 第26巻，2004，p. 71
- 45 井上，p. 71
- 46 <https://www.town.ikata.ehime.jp/site/fuusha/>，2022.8.13 閲覧
- 47 市川（2018），pp. 104 参照のこと。
- 48 「清家嘉壽恵」との表記もある。旧字体を避け、以後、「清家嘉寿恵」と記す。
- 49 「伊方町町勢要覧」，伊方町総合政策課 2021，p. 47
- 50 詳細は、本稿第5章参照のこと。
- 51 <https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:1/29/view/3890>，2022.8.14 閲覧
- 52 「三崎町誌」，三崎町誌編集委員会 1985，p. 604
- 53 「三崎町誌」，p. 603
- 54 2022年4月に刊行開始した同校機関誌のタイトルは「花橋」である。また、創立60周年のスローガン（2019年）は、「花橋 未来へ続く 道標」である。
- 55 「三崎町誌」，p. 604
- 56 <https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:4/96/view/14859>，2022.8.14 閲覧
- 57 巻末資料5参照のこと。
- 58 「伊予銀行五十年史」，伊予銀行五十年史編纂委員会 1982，p. 1204
- 59 「愛媛県史 芸術・文化財」愛媛県史編さん委員会，愛媛県1986，p. 469
- 60 「愛媛県史 芸術・文化財」，p. 470
- 61 「愛媛県史 芸術・文化財」，p. 472
- 62 「愛媛県史 芸術・文化財」，p. 472
- 63 「愛媛県史 芸術・文化財」，p. 472
- 64 阿部淳敬氏への電話インタビューによる，2017.3.13
- 65 「愛媛県史 芸術・文化財」，p. 476
- 66 「コールユーブンゲン 巻1 巻2」音楽之友社，1949
- 67 「コンコーネ50番 低声用」他，音楽之友社，1949
- 68 「ダンノーゼルのソルフェージュ 上下」，音楽之友社，1963
- 69 「愛媛県史 芸術・文化財」，p. 483
- 70 「愛媛県史 芸術・文化財」，p. 484
- 71 この部分の正確な記述は見つけられなかった。

資料：1

伊方町内小中学校統廃合の歴史



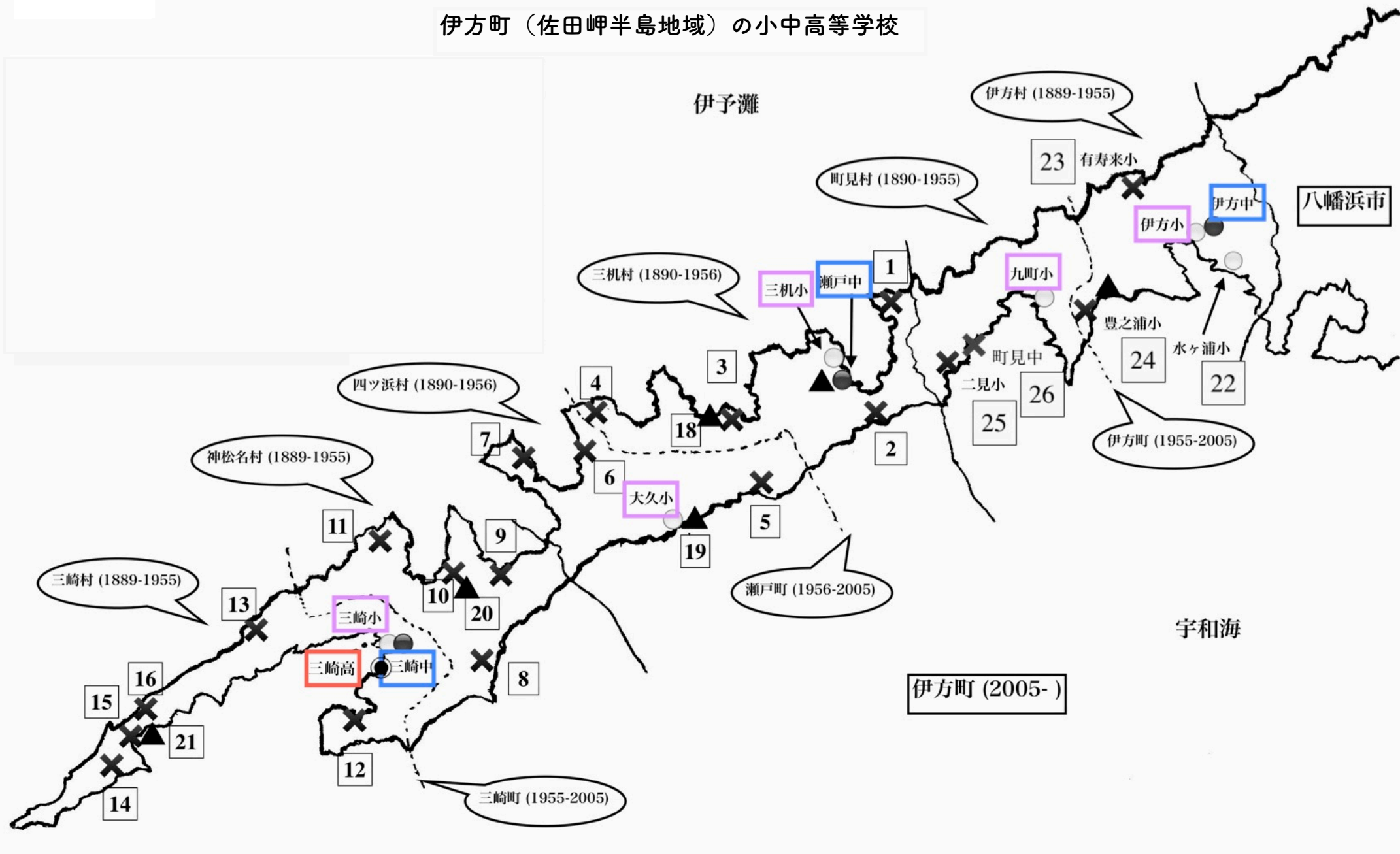


中学校

凡例：
 1871 開校年
 1978 閉校年
 ★1962 校歌制定年

資料：2

伊方町（佐田岬半島地域）の小中高等学校



資料：3

伊方町の小中高等学校（閉校になった学校を含む）

※1	※2	閉校(年)	番号	学校名	※1	※2	閉校(年)	番号	学校名	※1	※2	閉校(閉)	番号	学校名			
旧伊方町	旧伊方村	○	A	伊方小学校	旧瀬戸町	旧三机村	○	D	三机小学校	旧三崎町	旧神松名村	2003	8	名取小学校			
		2019	22	水ヶ浦小学校			1972	1	足成小学校			1977	9	釜木小学校			
		2000	23	有寿来小学校			2009	2	塩成小学校			2013	10	二名津小学校			
		2009	24	豊之浦小学校			1979	3	三机第二小学校			1977	11	松小学校			
		○	B	伊方中学校			1986	4	小島小学校			2006	20	二名津中学校			
	旧町見村	○	C	九町小学校		1994	E	瀬戸中学校	○		G	三崎小学校					
		2015	25	二見小学校		1994	17	三机中学校	1991		12	大佐田小学校					
		1998	26	町見中学校		1978	18	三机第二中学校	1993		13	与修小学校					
			○	F		大久小学校		旧四ツ浜村	○		F	大久小学校		旧三崎村	2005	14	正野小学校
			2003	5		川之浜小学校			2005		15	串小学校					
1979			6	田部小学校	2014	16			佐田岬小学校								
1980			7	神崎小学校	○	H			三崎中学校								
1994			19	四ツ浜中学校	2005	20			串中学校								
		○	I	県立三崎高等学校													

● 表は、現伊方町における合併前の区分、およびそれぞれの町村に存在した、あるいは現存する小中高等学校のリストである。なお、A-I は2022年現在現存する小中高等学校、1-20 は2022年までに閉校になった小中学校である。

● 表内の ※1 は、1955年～2005年の3町名（伊方町・瀬戸町・三崎町）を示す。

● 表内の ※2 は、1899年～1955年の6村名（伊方村・町見村・三机村・四ツ浜村・神松名村・三崎村）を示す。

● 閉校（年）は、閉校した年（年度ではない）、および「○」印は存続（2022年現在）している学校を示す。

● 番号 (A-I, 1-20) は資料2の地図中の表示と対応している。

2. 九町小学校

伊方町立九町小学校 校歌

作曲 若槻吉泰
作詞 坪内穂典

1
ハロー ハロー
ハロー ハロー
海は広いよきらきら広い
海から風が吹いてくる
世界を結ぶ海の風
みんなの心も結ばれる
海のほとりの海のほとりの
九町小学校

6
ハロー ハロー ハロー ハロー うみはひろいよきらきらひろい

10
うみから かがふいてくる せかいをむすぶ うみのかぜ

14
みんなの心もむすばれる うみのほとりの うみのほとりの

19
くちょうしょうがつ こう ハロー ハロー ハロー ハロー

23
そらはたかいよきらきらたかい そらの ひかりがふってくる

28
せかいをてらす そのひかり みんなのこころもあかるいぞ

32
そらのましたの そらのましたの くちょうしょうがつ こう

一
ハロー ハロー
ハロー ハロー
海は広いよきらきら広い
海から風が吹いてくる
世界を結ぶ海の風
みんなの心も結ばれる
海のほとりの海のほとりの
九町小学校

二
ハロー ハロー
ハロー ハロー
空は高いよきらきら高い
空のひかりがふってくる

世界を照らすそのひかり
みんなの心も明るいぞ
空のましたの空のましたの
九町小学校

九町小学校校歌

作詞 坪内穂典
作曲 若槻吉泰

ハロー ハロー
ハロー ハロー
ハロー ハロー
ハロー ハロー
海は広いよきらきら広い
海から風が吹いてくる
世界を結ぶ海の風
みんなの心も結ばれる
海のほとりの海のほとりの
九町小学校

ハロー ハロー
ハロー ハロー
空は高いよきらきら高い
空のひかりがふってくる
世界を照らすそのひかり
みんなの心も明るいぞ
空のましたの空のましたの
九町小学校

3. 三机小学校

三机小学校 校歌

中庸の速へてははきと (Allegro Moderato e Risoluto)

朝日に映える須賀の森
松の緑はわが心
ああ三机小学校
明るく直くすこやかに
育つぼくたちわたしたち

潮の香ににおう瀬戸内の
海のおおさはわが心
ああ三机小学校
強く正しくたくましく
学ぶぼくたちわたしたち

空にそびえる権現の
緑の光はわが心
ああ三机小学校
やさしく清くおおらかに
のびるぼくたちわたしたち

- 一
朝日に映える須賀の森
松の緑はわが心
ああ三机小学校
明るく直くすこやかに
育つぼくたちわたしたち
- 二
潮の香ににおう瀬戸内の
海のおおさはわが心
ああ三机小学校
強く正しくたくましく
学ぶぼくたちわたしたち
- 三
空にそびえる権現の
緑の光はわが心
ああ三机小学校
やさしく清くおおらかに
のびるぼくたちわたしたち

4. 大久小学校

大久小学校校歌

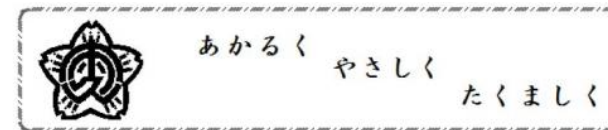
作詞：有志
作曲：阿部 淳敬

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

一
宇和の海原 白い浜
潮の香^か高い 学校に
みんな 明るく のびのびと
心楽しく よく学ぶ
ぼくの わたしの 大久小学校

二
緑豊かな 亀がくぼ
花咲きそろ^{さきなるえん}う 幸成園
みんな やさしく ほがらかに
飛んで かけて よく遊ぶ
ぼくの わたしの 大久小学校

三
夢は大きく 胸はって
学びの道を まっしぐら
みんな 手を取り たくましく
あすに向かって 伸びていく
ぼくの わたしの 大久小学校



あかるく やさしく たくましく

大久小学校校歌

作詞 有志
作曲 阿部 淳敬

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

二 緑豊かな 亀がくぼ
花咲きそろ^{さきなるえん}う 幸成園
みんな やさしく ほがらかに
飛んで かけて よく遊ぶ
ぼくの わたしの大久小学校

三 夢は大きく 胸はって
学びの道を まっしぐら
みんな 手を取り たくましく
あすに向かって 伸びていく
ぼくの わたしの大久小学校



5 A. 三崎小学校

三崎小学校校歌

作詞：山崎 貞行
作曲：成本 信夫

むしそあ かおろお しのおぐ ー わかあう こおしみ ー のとみま うー ー き夕べは ちイんず と夕がむ なイくむ ー りにね

一
昔倭寇の 基地となり
なびく旋風 南洋まで
ほこる歴史の 光受く
三崎小学 使命あり

なかくや もく びもあし くめたん はとらの たぶー かとしふ ぜぶくえ なちちた ーんはかか ーよおらま だわわか であるに ほとむほ こみらう

二
潮の香り ダイダイに
かもめはとぶとぶ 血はおどる
富と幸とに恵まれた
三崎小学 日は登る

るとのよ ー れきちん ー しととみ のにをに ひめにき かてなぼ ーりまいう ーれたるり

三
揃う足並 勉学に
雲新しく 力湧く
村の前途を 担いたる
三崎小学 風香る

みみみみ しよしよ ー ががが く しひか ーめは ーい あほりる
みみみみ しよしよ ー ががが く しひか ーめは ーい あほりる
みみみみ しよしよ ー ががが く しひか ーめは ーい あほりる

四
仰ぐ海山 はずむ胸
躍進の笛 高らかに
豊予の海に 希望あり
三崎小学 栄えあれ

5 B. 三崎小学校 百年賛歌

百 年 賛 歌

池 上 馨 作詞
阿 部 淳 敬 作曲

めいじしちねんかーいーこうの
ぼくらのがっこうみさきしょう
このきょうしつにわたしらのほんよむこえがはずみあり
あ あ ひゃねんのむかーしから
べんきょうをしたひとーびとの
ほんよむこえがひびきあり

百 年 賛 歌

一、明治七年開校の ぼくらの学校三崎小
この教室にわたしらの 本読む声がはずみあり
ああ百年の昔から
勉強をした人々の 本読む声がひびきあり

二、伽藍の峰を仰ぎつつ ここに建ったぞ三崎小
この校庭にわたしらの かけ足のおとこだまする
ああ百年の昔から
運動をした人々の 輝ける音寄せてくる

三、鎮守の森の空白み 三崎の夜が明けていく
今日一日の誓いもち ぼくらが通う三崎小
ああ百年の昔から
一日一日がんばった 人のすがたが浮かびます

四、九州四国を結ぶ町 黒潮寄せる三崎町
みかんの花も匂います わたしらの町三崎町
ああ百年の昔から
発展祈る人々の 心の歌が聞えます

- 一
明治七年開校の ぼくらの学校三崎小
この教室にわたしらの 本読む声がはずみあり
ああ百年の昔から
勉強をした人々の 本読む声がひびきあり
- 二
伽藍の峰を仰ぎつつ ここに建ったぞ三崎小
この校庭にわたしらの かけ足のおとこだまする
ああ百年の昔から
運動をした人々の 輝ける音寄せてくる
- 三
鎮守の森の空白み 三崎の夜が明けていく
今日一日の誓いもち ぼくらが通う三崎小
ああ百年の昔から
一日一日がんばった 人のすがたが浮かびます
- 四
九州四国を結ぶ町 黒潮寄せる三崎町
みかんの花も匂います わたしらの町三崎町
ああ百年の昔から
発展祈る人々の 心の歌が聞えます

6. 伊方中学校

伊方中学校 校歌

作詞 坪内稔典
作曲 河野美砂子

Piano

mf

Voc.

pf

Voc.

pf

Voc.

pf

Voc.

pf

Voc.

pf

Voc.

pf

「友よ」

一
風はきらきら
宇宙のひかり
伊方の空は 宇宙のひかり
ひかりの中を
進もう、友よ
体鍛えてすこやかに

二
波はきらきら
世界の響き
伊方の海は 世界の響き
伊方の海は 世界の響き
響く心を
磨こう、友よ
肩組み合っていつまでも

三
石路はきらきら
大地のいのち
伊方の土がはぐくむいのち
いのち尊び
励もう、友よ
未来へ夢を紡ぎつつ

7. 瀬戸中学校

瀬戸中学校 校歌

前・間

Handwritten musical score for the school song of Seto Junior High School. It features a prelude and main melody in G major, 4/4 time. The score is written for voice and piano accompaniment.

瀬戸中学校

三 二 一

校歌

潮のひびき聞きながら
われらが集う丘の上
寄せくる波を友となし
真理究めむ瀬戸中生
あすの故郷を担うなり

木々の息吹を感じつつ
われらが集う丘の上
さえざる小鳥に声を和し
友情深めむ瀬戸中生
あすの社会を築くなり

流れる雲を追いながら
われらが集う丘の上
回る風車に夢託し
理想求めむ
瀬戸中生
あすの世界を拓くなり

石見 利仁 作詞
高倉 理恵 作曲

1 うしおのひびき ききながら われらがつどう おかのうえ
2 きぎのいぶきを かんじつつ
3 ながれるくもを おいながら

よせくるなみを ともとなし しんりきわめん せとちうが あ
さえざることに こえをわし ゆうじふ かめん せとちうが あ
まわるふうしゃに ゆめたくし りそうもとめん せとちうが あ

す のふ る さい と に な う な り
す のし か さい と に き な う な り
す のせ か い を に き ず く な り
す のせ か い を ひ ら く な り

Handwritten musical score for the school song of Seto Junior High School, including lyrics and a final line of music. The lyrics are arranged in three columns corresponding to the musical lines. The score is written for voice and piano accompaniment.

- 一
潮のひびき聞きながら
われらが集う丘の上
寄せくる波を友となし
真理究めむ瀬戸中生
あすの故郷を担うなり
- 二
木々の息吹を感じつつ
われらが集う丘の上
さえざる小鳥に声を和し
友情深めむ瀬戸中生
あすの社会を築くなり
- 三
流れる雲を追いながら
われらが集う丘の上
回る風車に夢託し
理想求めむ
瀬戸中生
あすの世界を拓くなり

8. 三崎中学校

Andante 三崎中学校 校歌 木下 文作詞 清水 嘉寿雄作曲

佐田のみさきの のぶところ
 みかんの花の 匂う里
 やさしき心 すこやかに
 のびる若木の のびる若木の
 三中生 三中生 三中生 われら

伽藍の峯や 雲晴れて
 学びのいらか とこしえに
 心正しく 身は強く
 働く花の 働く花の
 三中生 三中生 三中生 われら

岬の燈 輝きて
 自由の鐘の 鳴るところ
 四海の友よ 幸あれと
 祈りつ学ぶ 祈りつ学ぶ
 三中生 三中生 三中生 われら

ああ光陰は 流される
 いそしむ学徒 肩組みて
 あたらしき世を 築かばや
 望みあふれる 望みあふれる
 三中生 三中生 三中生 われら

一
佐田のみさきの のぶところ
みかんの花の 匂う里
やさしき心 すこやかに
のびる若木の のびる若木の
三中生 三中生 三中生 われら

二
伽藍の峯や 雲晴れて
学びのいらか とこしえに
心正しく 身は強く
働く花の 働く花の
三中生 三中生 三中生 われら

三
岬の燈 輝きて
自由の鐘の 鳴るところ
四海の友よ 幸あれと
祈りつ学ぶ 祈りつ学ぶ
三中生 三中生 三中生 われら

四
ああ光陰は 流される
いそしむ学徒 肩組みて
あたらしき世を 築かばや
望みあふれる 望みあふれる
三中生 三中生 三中生 われら

9. 県立三崎高等学校

校 歌

じをこめて、
気は、

は や す い の づ に
は た か り な り の り に
い し こ し え に へ い わ

ただよう かほりあり ほなた ちはなや
いのちほ のびゆか みなち こうこ
ののちほ のびゆか みなち こうこ
まもる いしづえ と りそう はたがし

はなた ちは な や み ナ
みなち こうこ りそう はた ち
りそう はた ち

の は た だ け し も ぶ か
ほ の り せ い げん かい ね
か つ っ づ け ん かい ね
か つ っ づ け ん かい ね

き こ う ま れ っ ね あ れ

一
瀬戸の内海 宇和の灘
歴史も深き 速水の
渦にただよう 香あり
花橘や 花橘や 三崎校

二
誠集翁の 眠る地に
慈愛の光 照りはえて
真理の道を 一筋に
希望あふるる 希望あふるる 三崎校

三
伽藍の道を 仰ぎつつ
ゆるがぬ誓 永久に
平和を守る 礎と
理想は高し 理想は高し 三崎校

四
三崎の夜明け ほのぼのと
文化の鐘は 高なりて
若き生命は のび行かむ
三崎高校 三崎高校 栄えあれ

資料：5

清家嘉寿恵氏が作曲した愛媛県内の小中高等学校校歌

学校名	制定年	学校名	制定年
今治市立立花小学校	不明	中山町立野中小学校【現伊予市】 (2004年閉校)	不明
今治市立城東小学校 (2016年閉校)	不明	愛媛県立中山高等学校 (2013年閉校)	1961
今治市立立花中学校	不明	久万町立父二峰 (ふじみね) 中学校 (1999年閉校)	1966
今治市立桜井中学校	不明	久万高原町立直瀬中学校	1952
今治市立関前中学校	1965	内子町立五十崎小学校	1950
今治市立伯方中学校	不明	伊方町立二見小学校	1956
上島町立岩城中学校	1948	伊方町立旧伊方中学校 (1998年閉校)	1949
吉海町立泊小学校【現今治市】 (1981年閉校)	不明	伊方町立町見中学校 (1998年閉校)	1956
西条市河北中学校	1961	伊方町立三崎中学校	1952
西条市立東予西中学校	不明	三崎町立串中学校【旧三崎町現伊方町】 (2004年閉校)	1960
松山市立三津浜小学校	不明	愛媛県立三崎高等学校	1953
松山立岩小立岩小学校	1963	宇和島市立住吉小学校	1961
松山市立内宮中学校	不明	宇和島市立清満小学校	不明
松山市立勝山中学校	1960	宇和島市立城南中学校	1955
松山市立久米中学校	1948	宇和島市立城北中学校	不明
愛媛県立松山北高校中島分校	不明	宇和島市立津島中学校	不明
愛媛県立東温高等学校	1954	宇和島市立吉田中学校	1972
私立新田高等学校	1955	愛南町立御荘中学校	1957
砥部町立麻生小学校	不明	愛媛県立北宇和高等学校	不明
伊予市立翠 (みどり) 小学校	1958	愛媛県立野村高等学校	不明
伊予市立伊予中学校	1954		
伊予市立中山中学校	1948		